

---

# 機動戦士インフィニット・ストラトスOOF

イクス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士インフィニット・ストラトスOOF

### 【Nコード】

N3317W

### 【作者名】

イクス

### 【あらすじ】

一度やって見たかった転生物。主人公は平凡な生活を送っていたが子供を助けた事により死んでしまう。彼の前に現れた自称神は良いい行いをしたあなたにこれからの道を選ぶ権利を与えた。彼は並行世界で生きる事を選び、新たに自分の役をロール与えられる。彼はこの世界でなにをするのか・・・

## プロローグ（前書き）

イクスが書かせていただく第二作。  
プロローグです。

## プロローグ

「わたしは神です」

「かみ・・・？」

気が付けば何も無い真っ白な空間。

目の前には女性が一人。

しかも第一声は、『わたしは神です』ときた。

「簡単に言えば、あなたは死にました」

「死んだ・・・！？俺が・・・！？」

「はい、子供を助けようとしてトラックに撥ねられました。あ、子供は無事ですから」

トラックに撥ねられた・・・言われて見れば、確かに道路に飛び出し子供を助けようと撥ねられた記憶がある。

「ということ、ここは天国・・・？」

「そうです。あなたは死ぬ前に良い行いをしたので二つの道を選ぶ事ができます」

「二つの道・・・？」

「はい、一つは今いた世界に記憶を失って赤ん坊に転生して別の人生を歩む。もう一つは別の人間として並行世界パラレルワールドに転生する。好きな方を選ぶ事ができるわ」

「じゃあ、並行世界で」

「決めるの早いわね」

「タイム イズ マネーです」

「分かったわ。じゃあ、この中から、好きなカードを一枚引いてね」

目の前にいる自称神は、両手でカードを広げながら一枚引くように指示された。

「引くと、どうなるんだ？」

「引けば分かるよ」

つまり俺がカードを引かないと始まらないという事だろう。  
俺は右から三番目のカードを手に取った。

「キミの引いたカードはコレアストレア正義の女神」

「あすとれあ・・・？」

「うん、正義を司る女神の名前だよ。という事で君はフォン・スパークくんに決定！！」

「はい・・・？」

今まで、足が地に着いていた感覚が消え、宙に浮いている感覚に変わった。

そう感じると同時に、俺は落下した。

「にゃ~~~~~」

「じゃ、がんばってね」

自称神は手を振って落ちていく俺の事を見送った。

## プロローグ（後書き）

誤字脱字、感想、意見、お待ちしております

## 遅刻と起動と謎の少女（前書き）

タイトルが思いかば無かったのでオーズ風にしてみた。  
第一話です

## 遅刻と起動と謎の少女

気が付くとベッドの上で毛布を被っていた。  
今、見たのはすべて夢だろう。

「いま何時だ・・・」

手探りで目覚まし時計を探しながら呟いた。  
7時30分に起きて7時50分に家を出て学校に向かう。  
いつもと同じ平凡な朝が始まるはずだった。

「現在8時33分です」

「へ・・・?」

ベッドの横に誰かがいる。

声のした方を見ると一人の10代前半の容姿をした少女が横にいた。

7

「おはようございます、フォン・スパーク。あなたのサポートをするハナヨです」

「フォン・スパークって俺の事?」

「はい」

夢じゃなかった。

だけど目の前にいる少女が俺の事をフォン・スパークと呼ぶ以上、  
現実なんだろう。

「ハナヨちゃんだっけ」

「はい」

「ここは、どこ?」



「IS学園内にある学生寮1030号室です」

「IS学園・・・？」

知らない単語のはずなのに情報が頭の中に存在した。

IS学園とは、ISの操縦者育成を目的とした教育機関だったな。

さらにISとは、正式名称『インフィニット・ストラトス』女性にしか動かせない飛行パワードスーツ。

「もしかして、俺IS使えるの？」

「はい。手に見つけているブレスレットがそうです」

彼女に言われた通り、腕には見につけた記憶がないブレスレットが腕に身につけられていた。

「これはIS・・・」

ブレスレットを見つめた。

「フォン、現在の状況が確認できたら机の上を確認してください」

「机の上・・・」

ベッドの前にある机の上一枚の紙を見つけた。

『ハッピーバースデー、フォン・スパークくん。』

あなたは世界で二人目のISが使える男としてIS学園に入学してもらいます。

この世界の常識的な情報はキミの頭に勝手にインストールしておいて上げたから感謝してね。

因みにクラスは1年4組。

入学式4月 日8時30分だから、遅れない様にね。』

と書かれていた。

「4月 日・・・？」

入学式の日付を見てあたりを見回す。

あるのは現在時刻を現している時計と4月を現してるカレンダー！。

「ちなみに今日が入学式、当日です」

「え！！もしかして・・・」

「遅刻です」

ハナヨが言った言葉は俺にとって衝撃的な一言だった。

転生前は、無遅刻無欠席を貫いていた俺にとっては衝撃的だった。

因みに現在、8時59分である。

・  
・  
・

制服を着るのに少し手間取ってしまい、部屋を出るのにかなりの時間をロスしてしまった。

まずは寮の部屋から入学式が行われているであろう体育館まで猛ダッシュした。

しかし、すでに入学式が終了していたため1年4組を目指して再び猛ダッシュした。

到着と同時に4組の教室のドアを勢い良く開け、最初に見つけた大人の女性（担任の先生であろう）に頭を下げた。

「ハアハアハア・・・遅れました・・・ハアハアハア・・・」

肩で息をしながらゆっくりと息を整えた。

同じクラスメイトが居るであろう方向を向き。

「フォン・スパークです。よろしく申し上げます」

自己紹介すると同時に顔を上げた。  
目の前には見渡す限り女子だった。

「えっと……」

ヒソヒソ声が聞こえる。

「入学式、当日から遅刻だなんて、もしかして不良なんじゃない？」

グサッ

「目つき悪いし不良でしょ」

グサッ

いままであまり言われた事のない言葉の数々が心に刺さった。

「えっと、趣味は読書、一年間よろしく申し上げます」

「「「「「「「「「「「「」

目の前にいる女子はもっと聞きたいという期待の眼差しで俺の事を見ていた。

「はい自己紹介終わり、わたしは担任の長谷川葵よ。はせがわあおい一年間よろしくね」

担任の先生、長谷川先生のおかげで、期待の眼差しから開放された。

「よろしくお願いします」

「フォン・スパーク君の席は、一番後ろの窓際から二番席ね」

「はい」

席に着くと同時に授業が開始された。

・  
・  
・

「疲れた・・・」

「フォン、お疲れ様です」

今日の授業が終わり部屋に戻るとハナヨが出迎えてくれた。

授業中はクラスメイトから、暇さえあれば俺の姿をチラ見してくる。休み時間には、廊下から俺の姿を見ようとする女生徒であふれていた。

一言で言えばまるで上野動物園のパンダを見る列の様であった。教室にいる間は、気の休まる瞬間はまったくなかったと言える。

（そういえば、俺の横の二人は俺の事、見てなかったな・・・）

二人とも授業中も休み時間中もキーボードを打ち続けながらディスプレイを見ていたな。

（みんながそうだと助かるんだけど・・・）

今日の様な状況はしばらく続くだろう。

「そうだ、ハナヨちゃん俺のIS起動させてみたいんだけど大丈夫

かな？」

「ここでは、マズイと判断します。床が抜ける可能性があります。いまの時間ですと整備室がギリギリ使用できるはずです」

「じゃあ、行こうか」

「はい」

そう答えるとハナヨは、八口の中に戻っていった。

何でも、自分の存在がバレると不味いらしい。

なので、人前に出る時は八口の中に戻るらしい。

「さて、行きますか」

サッカーボールを持つ要領で八口を右脇に抱えて整備室に向かった。

・  
・  
・

俺とハナヨは使用可能時間ギリギリだが、第二整備室に到着した。

ハナヨは誰も居ないと判断したらしく八口の中から少女の姿で現れた。

「それでは、アストレアを起動させてください」

「起動・・・？どうやるんだ・・・？」

この世界の常識的な情報はインストールしてくれたいが、専門知識はインストールしてくれなかったらしい。

「ブレスレッドに意識を集中させてから、念じてください」

「ブレスレッドに意識を集中させて・・・念じる・・・」

自然と俺は目を閉じて、ブレスレッドに腕を添え意識を集中させて

いた。

(念じる………来い、アストレア)

念に答えるように光の粒子が強い光を放った。

光の粒子が集まり形を成していき、全身が装甲に包まれた。

「起動成功です」

「おお………凄いな………」

目を開くと両腕が装甲に覆われている事が分かった。

それだけではない、顔から足のつま先まで白を基調としたトリコロールカラーで装甲で覆われていた。

「俺が思っていた姿と違うな。ISって体の一部に装甲を持たせる物だと思っていたが。」

「基本的にISには絶対防御など装着者を守るシステムが備えられているので体を露出してもいいのですが、本機体には特殊なシステムが数多く搭載されているため全身装甲フル・スキンを採用しています」

「そうか………特殊なシステムって例えば？」

「例えばですか………そうですね、動力源に使用されている『GNドライブ』ですね」

「GNドライブ……？」

「通称『太陽炉』アストレアの稼働エネルギーの他、攻撃から防御飛行時の推進力に使用される半永久機関です」

「つまり、アストレアの心臓フィッティングって分けだな」

「その通りです。では、最適化処理を開始します」

ハナヨは空間投影ディスプレイを操作し始めた。

開始から約10分後。

「最適化処理フィッティング終了。これでアストレアはフォン専用機になりました」  
「俺の専用機……」

言われて見ればアストレアが俺の体に馴染んでいる気がした。

「武装はなにがあるんだ？やっぱり、ビームライフルとかハンマーとかあるのか？」

「現在、武装は腰背部にある2基のGNビームサーベルだけです」  
「それだけか……!？」

機体は凄いが、武装は拍子抜けもしい所だ。

「なんか、悲しいな……」

「そう言わないでください。現在、GNビームライフルとGNシールドを製作中です。早ければ3日で完成します」

「そうか、それを聞いて安心した」

起動させた時と同じように念じると体を覆っていた装甲が、光の粒子となって消えた。

「さてと、明日もあるしそろそろ帰るか」

「はい」

俺は来たときと同じように八口を右脇に抱え、第二整備室を後にした。

二人が出て行ってからすぐに一つの影が動いた。

「やっと出て行った・・・」

二人が使用していた隣の整備ブースからセミロングで癖毛の少女が出てきた。

「今の、今日遅れてきた・・・」

今朝の出来事を思い出した。

入学式に主席せずSHRに遅れてやってきた少年フォン・スパークの事を。

「専用機・・・」

一世代前に人気だったアニメに出ていたロボットみたいな外見に少し興味を引かれた。

「それに、あの子はなに・・・？」

彼が持つてきた球体状のメカから現れて消えた少女を目撃していた。



**遅刻と起動と謎の少女（後書き）**

感想、意見お待ちしております。

**設定 9月1日更新(前書き)**

新しい設定が増えるたびに更新します

## 設定 9月1日更新

### 登場人物設定

#### フォン・スパーク

自称神に死ぬ前に良い事をしたから並行世界に転生させてもらった転生者。

転生前は平凡な名前で平凡な生活を送っていた高校一年生。

ISの世界の情報は必要最低限の事柄だけ頭に入れている。

#### 性格

見て判断し、行動する。

悪い状況ほど燃えるタイプ。

容姿などは機動戦士ガンダムOOFに登場するフォン・スパークを参照

#### ハナヨ

自称神と一緒に送り込んだホログラフの擬似生命体。

普段はネコを思わせる特徴的な小型端末機「ハロ」として行動。情報収集、戦闘のサポートなどを行う。

フォンには明かせない役目を持っている。

容姿などは機動戦士ガンダムOOFに登場するマイスター874《ハナヨ》を参照

#### IS設定

#### ガンダムアストレア

形式番号 GNY-001

機体名はタロットカードの『正義』に描かれる『正義の女神』<sup>アストレア</sup>に由来する。

機体カラーリングはトリコロールカラー。

エクシアの系列にあるプロト機体。

基本武装

GNビームサーベル

腰背部に2基を装備する。

その他、OO機体の装備を使用する予定。

クラス代表フォン・スパーク（前書き）

第3話です

## クラス代表フォン・スパーク

入学式から数日経った。

同じようにSHRが終わり授業が始まった。

状況もあれからと変わらない、上野のパンダ状態だ。

だが、あれから違う事が一つだけあった。

(どういうことだ・・・)

新たな視線を感じていた。

視線の主は左隣に座っているセミロングで癖毛の子だった。

名前は確か、更識簪さんだったな。

(なぜだ・・・)

彼女の興味を引くような行動はしていないはずだ。

というか、なにに興味を持っているのかすら分からない。

視線を合わせようとすると視線をそらされ、こちらも視線をそらす  
とこちらに視線を合わせてくる、いちごっこ状態だった。

(まだ、パンダの方がましだな・・・)

いちごっこは、しばらく続いた。

・  
・  
・

午後の授業は午前の授業とは雰囲気違った。

「先生すっかり忘れてたんだけど、来週に行われるクラス対抗戦に

出るクラス代表を決めたいと思います」

聞けば、本当は入学式当日に決める予定だったらしい。すでに、うっかりを超越している。

クラス対抗戦というのは、入学時点での各クラスの実力を測るための行事らしい。

クラス代表になると対抗戦に代表として参加するだけではなく、生徒会が開く会議などの出席するなどがプラスされる。

「自薦他薦は問いません。誰かいませんか？」

「フォン・スパーク君を推薦します！」

「あ、私も賛成です」

最初の賛同を合図に次々と俺を推薦していく声上がる。

『彼ならきつとなんとかかしてくれる』という意思が見え隠れしている。

これ以上、俺を推進する声上がる前に否定しなければ。

「先生、辞退したいのですが・・・」

「ん、私もキミの力、見てみたいし、何より生徒の意見を尊重したいから」

「俺の意見は尊重して貰えてないのでありますが・・・」

「じゃあ、多数決という事で、フォン・スパーク君に決定。はい、拍手」

拍手の嵐、クラスは大いに盛り上がった。

この学園に二人しかいない男の力を見るためとはいえ、少し強引な様な・・・。

盛り上がっている中、何人かの生徒は不満があるようだった。

といっても、代表候補生で専用機持ちの俺に対して対抗馬として立

候補する物はあらわれなかった。

放課後、部屋に戻ると扉の脇に封筒が挟まっていた。

「手紙・・・？」

俺は部屋に入ってから、中身を確かめた。

『あなたの秘密を知っている。  
これを見たら第二整備室まで』

と書いてあった。

封筒と手紙を良く調べたが、差出人は書いてない。

「フォン、どうかしましたか？」

いつもの姿でハナヨが話しかけてくる。

「ハナヨちゃん、アストレアとキミの存在って他人に知られると不味い？」

「いえ、アストレアはフォンの専用機として登録されているので問題ありません。わたしも、この状態は作業効率を上げるための形態なので問題ありません。ですが、この姿で一緒にいることが広まるのは不味いかもしれません」

俺が自作した小型端末機という事になっている。

とりあえず手紙に書いてある通りに、俺とハナヨは第二整備室に向かう事にした。



第二整備室に到着した時、部屋の中にいたのは更識さんだけだった

「ここ、他に誰か来てる？」

彼女は黙って首を横に振った

「もしかして、この手紙くれたの更識さん？」

彼女は黙って頷いた。

「・・・入学式の日・・・隣の部屋に・・・いた」

「隣に・・・？」

「・・・それは・・・なに？」

俺が抱えている八口を指差す。

彼女が八ナヨの事を聞くとという事は秘密というのは八ナヨのことだろう。

『八ナヨ、八口、八ナヨ、八口』

「これは、俺が作った『八口』の八ナヨ。多分君が言いたい秘密って言うのは彼女のことかな？」

俺が八口を床に置くとホログラムが展開されて八ナヨの姿で現れた。

「・・・これ・・・ホログラム？」

「始めまして更識簪さん。わたしの名前は八ナヨ、フォンのサポーターを任されています」

「・・・すごい」

彼女はハナヨ（ハロ）を見ながら関心していた。

「さつき入学式の日、ここにいたって言ったよな？なにを  
してたんだ？」

「・・・専用機・・・作ってた」

「専用機・・・？」

彼女は右腕を軽く突き出した。

その中指には、クリスタルの指輪がはめられていた。

「おいで・・・『打鉄二式』・・・」

ISが展開された。

打鉄二式は、学園で訓練用に使われている打鉄とは異なり全体的にスマートな印象であった。

「作ってた・・・？もしかして、完成してる？」

「・・・装甲だけ・・・まだ中身が・・・まったく出来てない」

そう言っただけで彼女は、ISを解除された。

「あと・・・ここで・・・作業するなら、その姿は・・・目立つ  
と思う」

目立つというのは、ハナヨの服装の事だろう。

学園内で制服を着ていない人物はそんなにいないからな。

「わかりました。更識さん、グルッと一回転して貰ってもいいです

か

「?・・・わかった」

更識さんはハナヨに言われた通りにグルッと一回転した。

「スキャン完了。ホログラムのアップデート開始」

そう言ったハナヨの服装がIS学園の制服に変わった。

「アップデート完了」

「お前、便利だな」

「もしかして・・・体格も・・・変えられる・・・?」

「はい、データさえ有れば可能です」

ハナヨはデータが有れば服装、体格を変えることができるらしい。

「じゃあ、今の体格はフォンの趣味・・・?」

「なっ・・・!?」

俺は思わず絶句した。

ハナヨの現在のすがたは、十代前半を思わせる姿をしている。

つまり彼女は、ハナヨの姿を見て俺の事を『ロリコン』だと思っているという事だろう。

「わたしが、ネット上で集めたデータを基にこの姿を形成しました。自分でもこの姿が気に入っているなのでこの体でいます」

「・・・そう・・・ならいい」

ハナヨのフォローで更識さんは、一応納得したようだ。

「そつだ、更識さん夕食まだだよね？」  
「・・・うん。まだ・・・行ってない」  
「じゃあ、一緒に行こう。奢るからさ」  
「・・・??どうして・・・」

いきなり奢ると言われて納得できる者はいないだろう。

「ハナヨの口止めと言う事で」  
「口止め・・・?」

彼女は少しハツとした様に言った。

「まさか・・・趣味の」  
「違う!!俺はまともだ!」  
「・・・じゃあ、どうして・・・?」  
「ハナヨの事を、言いふらさないで欲しいだけだ」

先ほどのハナヨの言葉で誤解は、解けたと思ったけど彼女はまだ『ロリコン』だと思っているらしい。

「・・・奢って・・・貰わなくても・・・言いふらしたり・・・しない」  
「いや、だけど・・・」  
「フォン、行くなら早くしないと食堂が閉まってしまいます」  
「じゃあ、急ごう、更識さん!」  
「え・・・ま、待って。まだ、話があるの」

急いで学食に向かおうとしたが、まだ話があるらしい。

「お願いが・・・あるの」

「お願い・・・？」

更識さんは、ゆっくりと話し始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3317w/>

---

機動戦士インフィニット・ストラトスOOF

2011年10月9日16時07分発行